

大楽光明教諭による生き物をめぐる学級文化の創造—物語生成として構想される子どもの自然体験—

The Creation of the Classroom Culture about Creatures by DAIRAKU Mitsuaki

- Children's Nature Experiences Planned as a Story -

木村 学

KIMURA Manabu

國學院大學幼児教育専門学校

[要約]子どもの自然体験を考察する上で、なぜ学級文化の創造を問うのか。それは、子どもは自然とかかわる生き物の捕獲や飼育などの場面において、試行錯誤を繰り返し創意工夫を生み出す経験によって独自の文化を創造し人間形成が為されてきたからであり、こうした自然とかかわる子ども文化の創造は、市井の自然遊びが喪失している現在、学級にこそ再生の可能性があるのではないかと考えるからである。学級文化の創造という視点から子どもの自然体験を分析・考察するためには、子どもたちと実践者の日々の生活とその際の自然に対する価値変容を継続的に示すデータが必要となる。そこで本研究では、子どもたちと日々の学級生活を書き綴ってきた小学校教諭・大楽光明の学級通信の実践を、学級文化創造の手がかりとして分析を試みたい。

[キーワード] 学級文化 物語生成 自然体験

1. はじめに

本稿では、まず「子ども文化」に関する所論を整理し、子ども集団の文化の創造という側面から自然体験が構想される必要を述べる。そして、学級文化の創造がいかんにして実現可能となるのか、大楽の教育実践の分析によって検証する。大楽の2006年度の学級通信を資料として、生き物に関する言葉を全て抜粋し、ドキュメント分析を行う。学級通信には、カマキリ、ヤモリ、コオロギ等の捕獲や飼育をめぐる子どもたちの言葉や、それに呼応する教師の言葉が掲載されており、そこに子どもたちと教師の絶え間ない相互応答的なコミュニケーションの軌跡が浮かび上がってくる。本稿の分析を通して、子どもと教師の物語生成として構想される自然体験の在り方を提示したい。

2. 研究背景

我々人間は、身の周りの事物に対して意味づけをしないではいられない存在であり、自然という対象についても、それが人間との関連でどのような価値を有しているかという視点から捉え直され、人間の世界のものとして組み入れられる(池上 1984)。子どもの自然体験を考えた場合、子どもは身体と外界の相互作用によって自然とかかわり、自然への意味づけが為され個々人の生活世界が形成されると考えら

れる。子どもたちの自然体験や遊びは、そこに自然の変化や不思議さを見出す楽しみによって、子どもたち独自の文化として伝承され創造されてきたものである。藤本(1985)は、「子ども達によって習得されたり、創りだされたりした子ども達固有の生活様式であって、子ども達の間に分有され、伝承されているもの」を「子ども文化」と呼ぶ。しかし、このような子ども集団は、もはや自然発生的に現出するものではない。子どもたちの異年齢集団は環境の変化だけでなく、子どもたちの生活時間のあり方とともに崩壊し、いまや遊びの異年齢集団はほとんど存在しない(小川 1998)。はたして我々大人は、子ども集団による文化の創造となり得る自然体験をどのように構想することができるのだろうか。元来、我が国の学級は地域共同体の「子ども組」などに見られる生活集団の機能を生かした人間関係の凝集性のもとに展開されたものであり、学級には教師と子どもたちの協同による自治と文化の創造が求められている(安井 1990)。それでは、学級の子どものたちによってどのような自然体験が展開され、学級文化が形成されるのだろうか。大楽学級の生き物をめぐる学級文化の創造のプロセスについて見てみよう。

3. 生き物とかかわる学級文化の創造プロセス

表1 サナギの発見, カブトムシの死

子どもの日記	教師の言葉
<p>2006/5/17 <u>ぼくはなんかのさなぎを、みつけました。しかも2ひき、白色ときみどり色です。(1)ぼくは、せんせいのばしょまでいきました。そして、せんせいはふくろをくれました。ぼくは、はじめてなまでさなぎを見たのですごいとおもいました。</u></p> <p>2006/9/12 <u>ぼくの家ではカブトムシとノコギリクワガタを飼っています。ふつうのカブトムシです。(2)ふつうのカブトムシは、オスとメスが2ひきずつです。でもノコギリクワガタは、オスとメス1ひきずつです。カブトムシは、夜の間に土をほったり木をいじったりえさを食べたりしてさがそとうるさいです。ふつうのカブトムシがとんでいるのを見たことがあります。でもノコギリクワガタがとんでいるのを見たことはありません。ぼくと妹で御世話をしています。</u></p> <p>2006/9/12 <u>今日の朝、カブトムシがしんでいてがっかりしました。でも卵をうんでからしんでしまったから、しめいをはたしてからしんだということです。(3)でもたまごをうんでしんだのはいいけどメスがしんでしまったことがざんねんです。</u></p> <p>2006/9/13 <u>今日の朝カブトムシを見たら死んでいました。でももう一ひきは、生きています。交尾してたところの〇〇のおじいちゃんに聞きました。だから一年たったら生まれるだろうと思っています。(4)</u></p> <p>2006/9/16 <u>2,3日前からカブトムシが弱っていました。2,3日前は、いつもより、うごきがなくなっていました。けれど今日になったら、しよっ角しか動かなくなっていました。とつてもかなしいです。でも、オスで長生きしたのは、これで2匹目です。でもけっこんしたメスがたまごをうんでくれました。(5)</u></p> <p>2006/9/19 <u>今日、スクスク(放課後の遊び場)に行きました。スクスクにあるカブトムシを見ていたら、メスがすなをほっているの、ぼくは、「たまごをうむのかな。」と思いました。(6)5分ほど立ったら、木の下にもぐってしまったのでみえませんでした。</u></p>	<p>2006/5/30 全校遠足のあった17日、Y君が篠崎公園草むらから二種類のさなぎを見つけてきました。どちらもサクラの葉の表面に張りついたマユですが、色合いは白と黄緑と微妙にちがっていました。おそらくガのさなぎだろうと思われま。教室の後ろのたなにおかれて十日ほどたちますが、今のところ目立った変化はありません。(1)21日、Y君は千葉のしんせきの畑からたくさんの青虫をもってきました。「モンシロチョウ？」と大騒ぎになったのですが、どうやらそうではないようです。青虫は次々と葉を食べ大量のふんをし、強烈なおいを発します。エサの補充がないままになっていたのですが、H君が発見します。「センセー、Y君の青虫がさなぎになってるよ。」(2)H君さんはさっそく「しぜんのおたより」にまとめ始めるのですが、その時、とつぜん大声をあげました。青虫の入った虫かごのかべに貼りついたさなぎをスケッチして、虫かごのふたのうらにたくさんのさなぎが貼りついていたことに気付いたのです。たくさんの青虫はたくさんのさなぎに変身していました。個々から、いったいどのような成虫がでてくるか。今のところ変化はありません。昆虫は、卵→幼虫→さなぎ→成虫という成長をしますが、バッタなどの仲間は、この成長のしかたとはちがいます。さて、どのように変身していくのでしょうか？(3)</p> <p>2006/9/27 12日からカブトムシが死んだという日記が相次ぎました。(中略)カブトムシは初夏に生まれ、そして、今ぐらいには“しめいを果たして”死んでしまいます。でもS君、T君、O君、k君はスクスクでたまごを産むことを目にしたようです。ぜひ、新しい生命のたん生んで大切に育ててほしいものです。(4)</p>

表1は、子どもたち一人ひとりの、サナギやカブトムシなどの生き物との関わりを示したものである。Y君は遠足のときに見つけたサナギについて、はじめて本物に出会った驚きを記している(下線1)。そして、Y君が見つけたサナギは教室に置かれることになるが、10日ほどたっても変化がないことが大楽から報告される。そして、大楽からサナギの特徴についての詳細な描写と、サナギはガになるのではないかという予想が示される。(波線1)。その後、Y君は、親戚の畑で捕まえたたくさんのおオムシを教室に持ってくる。やがてアオムシは、虫かごのふたの裏でサナギになり、H君さんはさっそくその様子をスケッチする(波線2)。

大楽からは、生き物の成長の変化について問題が出されるが(波線3)、その後、クラス内での生き物やサナギについての記述はない。二学期になり、子どもたちからは、カブトムシの飼育とカブトムシの死について報告が為される(下線2,3,4,5,6)。大楽からは、カブトムシの死によって秋が近づいてきたこと、やがてカブトムシの新たな命が生まれることを期待する言葉が示される(波線4)。この段階では、子どもたち個人による生き物の成長の変化への期待や、生き物の命の喪失と落胆、誕生と期待といった感情を読み取ることができるが、学級全体による生き物への共感や、生き物にまつわる文化の創造を読み取ることはできない。

表2 生き物係の誕生, コオロギワールドをつくらう

子どもの日記	教師の言葉
<p>2006/9/20 <u>ぼくは、すず虫を飼っています。6月ごろタマゴからかえってそだてました。けっこう大きくなりました。色は黒です。食べ物、ナス、キュウリ、ニンジン、かつおぶし、と墨です。水もシュツ、シュツとあげています。リーン、リーンと鳴きます。羽で音がリーンと鳴ります。すず虫は、バッタなどのさなぎにならない虫の仲間です。(7)まだまだ大きくなります。</u></p> <p>2006/9/28 <u>しまった。やばい、どうしよう。メダカにエサと、電気をけすのを2回目だ。どうしよう、どうしよう。先生がけしてくれるかなあ〜。メダカしかないかなあ。それから生き物係は、コオロギワールドを作んなきゃ、でも土手では、コオロギがいるはずだと思います。今度、捕まえてもってこようかな〜と思います。…でも泣き声だけでも、姿が、わかりません。これ</u></p>	<p>2006/9/27 今年はどうしたことか、〇〇の花だんにショウリョウバッタを多く見かけます(中略)秋のおとすれといったら、何と言っても“虫の音”。外国の人にとっては、秋の虫の鳴き声はただの雑音としか聞こえてこないそうです。秋の虫たちをマンガにする時、よくバイオリンを持たせるが、O君の飼っているスズムシやコオロギは、バイオリンとほぼ同じ仕組みで音を出しているという。左右のこすれ合う羽の一方はヤスリのようなギザギザ、他方はマサツ片と呼ばれる硬い部分があって、それをこすり合わせているらしい。バイオリンと同じことをしているととびつくりするのだが、ひよつとすると、秋の虫の鳴き方をじっくり観察した人が、真似して作り出したのかもかもしれません。ところで、鳴く</p>

からは、じみちにさぎょうをしていきたいです。(8)

2006/10/5 きょうスクスクスクールで生きものがかりなので、ずかんでコオロギのことをしらべました。(9)しらべてわかったことは、いろいろな虫のしがいを食べることだけです。キリギリスのことも分かりました。キリギリスは、たまねぎのにおいが好きだそうです。こんどコオロギをつかまえないといけないので、しかけをいきものがかりのみんなで作りたいとおもいました。(10)

2006/10/12 今日学校に行きました。そしてN君のカマキリのはいった虫かごをみると、はらだけのカマキリがおちていて、もう一びきカマキリがいておどろきました。コオロギワールドがカマキリ帝国になってしまいました。このままコオロギがいないとコオロギワールドがなくなるのでつかまえます。(11)

2006/10/12 今日ぼくはコオロギの図鑑でいろいろなことを調べました。(12)コオロギのオスとメスの見分け方は、おしりです。メスの方はまるで注射器のような針です。オスは二本の角はあるけどふさふさしています。あとコオロギはきれい好きです。それは首を伸ばして後ろ足をなめているからコオロギはきれい好き。それでコオロギがいる場所は空き地です。でもどうしても見つからないときは足で草をふみつぶすとコオロギはたまに出てきます。だから実際にやってみます。(13)

2006/10/14 今日、庭で、ナメクジをとろうと植木鉢を持ち上げたら、コオロギがオスとメスが一びきずついました。オスはつかまえました、メスはにげられてしまいました。その後、オスにもにげられてしまいました。今、母が考えたしかけをしかけています。入ったら学校へ持っていきたいです。(14)

2006/10/15 金曜日、H子さんとダンゴムシをさがそうとさがしたのではありませんでした。それでバッタも見つけて弟もいっしょになってバッタをあつめました。ダンゴムシのかわりにもって行くかなと思っています。虫かごの大きさは学校にあるのより少しでかいくらいです。バッタワールドでもいいんじゃないですか？あさってもって行ってもいいですか？(15)

2006/10/15 ヤッ！バッタつかまえた。そして、O子ちゃんとさがすことにした。ずいぶんとれました。でっかい虫かごにいった。二回もあそんだからいっばいとれた。さっそくへやをつくってあげることにした。ないているからコオロギになるかなと思いました。でもバッタが見つかってよかったです。コオロギワールドのよこに、おきたいなと思っているからです。(16)

のはオスとメス、どっち？そして、それはなんのため？(5)

2006/10/3 H子さんが、最初にカードを持ってきた。「女子3人、男3人で生き物係を作ります」三の一の係が誕生した瞬間です。(6)カードにはこんなことが書かれていました。目的としては「生き物を大切にすること。三の一の目あてとのつながりは、生き物を大切にすることは友達を大切につながります。」(中略)15日の放課後、O君がエサをやるうとしていたら、H子さんが「私やったよ」「○○さんもやってみてよ・・・」それを聞いていた、ぼくが「それまづいな。エサのやりすぎは、水を腐らせるよ。メダカが死んじゃうぞ。」と声をかけます。さらに「エサをやったよっていうチェック表みたいなのがあるといいかもしれないね。考えてみてよ。」と話すので「やろう！今からやるう。」とO君を促します。(7)

2006/10/12 生き物の係が“コオロギワールド”を作ってくれました。花壇の土を入れました。ジャガイモやホウセンカが芽を出しています。ミズが一びき紛れ込んだらいいです。拾ってきたクルミヤトチノミ、ドングリの実はいっていますが、かんじんのコオロギがいません。コオロギをつかまえてきて下さい。・・・コオロギ捕まんないかなあ。できたら、オスとメスがいたらすばらしい。みんな、つかまえてきて下さいよ。(8)“コオロギワールド”の水そうの中に、一年生であるホウセンカがたくさん芽を出していますが、これからちゃんと育てていくの？こちららも気をつけて観察して行って下さい。

2006/10/21 どうしたものか、今年はコオロギがつかまらない。鳴き声はするのだが・・・先日も近くの公園から早稲田大学の構内へときがし歩いたのだが、だめでした。(9)(後略)

2006/10/25 どうしたものか、コオロギもダンゴムシもないようなのです。(10)A子さんとH子さんは、バッタを捕まえてきちゃったようで、大きな水そうに土や草を入れてもってきました。(中略)バッタ王国、うまくすると、卵を産んでくれるかもしれませんよ。バッタが死んでしまっても、土がかわかないようにキリ吹きて水をやるようにすると。来年の夏にはたくさんバッタが出てくるかもしれませんよ。そのためには、あまり日当たりのよいところにほかないことと、やわらかな土にするためにミズを入れてやるといいですよ。カマキリ帝国の土の中にミズがいるはずですよ。移してあげて下さい。まさか“カマ王”でもミズは食べないと思います。・・・バッタ王国のこれからに期待していますね。(11)

表2は、クラスに生き物係が誕生し、コオロギワールドをつくろうと試みる時期を示したものである。O君は家でスズムシを飼っていることと、スズムシの生態について日記に報告している(下線7)。それに応じて、教師から虫の音やコオロギの生態についてより詳細な言葉が投げかけられる(波線5)。ちょうどこの頃、メダカのエサやりをめぐる問題が発生し(波線7)、解決のために生き物係が結成される(波線6)。子どもたちによって自主的に結成された生き物係は、コオロギワールドをつくろうと試みる(波線8)。しかし、子どもたちはなかなかコオロギを捕まえることができず、図鑑などで生

態を調べたり、仕掛けを作成したりと捕獲するための試行錯誤が続く(下線8, 9, 10, 12)。コオロギを捕まえようという思いは、生き物係だけでなくクラスの他の子どもたちにも共有されていくようになる(下線11, 14)。同時に教師にとっても、コオロギを捕獲したいという思いは強くなっていくが(波線9, 10)、代わりに子どもたちはバッタを捕まえてきて、教室で飼育を始める(下線15, 16)(波線11)。この時点で、クラスの子どもたちには、生き物を捕まえて飼育しようという共通の願いが芽ばえ、学級文化の萌芽が形成されていると解釈できる。

表3 カマキリ帝国

子どもの日記	教師の言葉
2006/6/14 今日、だいどころのまどにヤモリがいました。(17)じーっと見てたらうごきました。わたしは、びっくりしました。とくになにも学校にもっていくなんで考えてはなかったんです。でも、いちおう学校にもっていきかけたです。思いました。そっかヤモリもてないなと思ってたら、きょうにまたうごいたからびっくりしました。ヤモリは、がいちゆうや、カなどたべてくれるからとてもえんぎがいいいきものです。あと	2006/10/25 コオロギワールドを作ろうということになって以来、三の一には、いろいろな生きものが登場してくる。“類は友を呼ぶ”というたとえもある

家のまもりがみです。だからわたしは、ずーつといしてほしいなと思いました。

2006/6/26 今日、おばあちゃんの家のまどにヤモリがいました。(18)トカゲだと思いました。よくみたら10センチぐらいでした。お母さんに言うともかしからときどきいたそうです。凶鑑を見るとヤモリは、もともと森林にすんでいたが夜光にあつまる虫を食べるために家にすみつくようになった。天じょうやカベのわれめにたまごをうみます。たまごは2こむ。40日から50日にたまごがかえります。

2006/10/17 今日、学校のうらの入口にも虫がいました。(19)M君がぼうでつつくといも虫がおどりました。こんなおどりをしました。Cになって次にCのはんたいになっておどっていました。ふしぎだと思いました。M君が葉っぱでつかんでもっていききました。びっくりして、なんかいも虫おどしました。やっつくばこのあるところにつきました。ぼくが葉っぱをもってきてふしぎないも虫をサンドイッチにしました。あと4段でのぼれたのに、おどしてしまいました。O君とM君でもっていききました。やっつきました。

2006/10/18 今日、カマキリ帝国に守宮がいました。先生は三年二組の水そうに電気がついていたから消してもどって来た時に教室に入ってきたと言いましたよね。でもどうしてこんな所に・・・はい上がって来たのかな。こんどは逆にカマキリが食べられそうだと思います。キャタビー(青虫)には早くちょうになつてほしいです。(20)

2006/10/14 今日、凶鑑でカマキリを調べました。(21)蝶やカブトムシは幼虫から成虫になる時、途中さなぎになって羽化して成虫になる。これを完全変態といいます。カマキリやバッタは幼虫が何回か脱皮して、その後もう羽がはえた成虫になります。またセミやトンボは幼虫の時と成虫の時の形が全然ちがうけどさなぎの状態がありません。こういう昆虫を不完全変態といいます。

2006/10/19 今日、蟻螂帝国で戦いが始まりました。蟻螂対守宮です。蟻螂が最初に襲いました。守宮は逃げ足り尻尾で反抗しました。でもさすがに蟻螂は怯まず自慢の鎌で守宮を捕まえて噛んでいききました。守宮は無残な姿で食べられていました。一方、青虫キャタビーは逃げていました。(22)

2006/10/19 ぼくの教室3の1には、カマ王がいます。なぜカマ王と言うかと、他のカマキリを二ひきも、毛虫を二匹、バナナ虫を10匹きぐらい、そしてさらに今日、ヤモリまで食べてしまいました。(23)だから、カマキリの王さま、やくしてカマ王なのです。カマ王は今日、先生がくれたヤモリまで食べてしまいました。ぼくは、ぞ〜っとしました。

2006/10/19 今日、ひるやすみにカマキリとヤモリがたたかっていた。(中略)ぼくは、カマキリは、バナナ虫は食うわ、はえはくわ、めっちゃこわいことをしました。まだぶじに生きのびているキャタビーは、くわれるか生きるかしんばいです。こんどは、メスカマキリをつかまえて、カマキリてい王をころして、あらたな虫てい王を作りたいです。(24)(中略)でも、もう毛虫、オスカマキリ、バナナ虫、ミズ、ミニミズがたおされました。でも、ほかのオオカマキリ、どく大グモ、カエルや、そういうやつをぜつたいにつかまえて、カマキリてい王をたおしてみせます。でもほかの人がつかまえて、てい王にかつたら、そいつをたおしたいです。(25)

2006/10/31 今日、なんだか朝、学校にきたらカマ王がキャタビーを食べていて、みんながみにいって、私もみにいきました。どうどうキャタビーしんでしまったので、だれかがカマ王ころせ!と言ってました。かわいそうと思いました。(26)

2006/10/31 今日、朝、学校にきたら、みんなカマキリを見ているから、ぼくも見てみました。すると、キャタビー(青虫)が食べられていたのです。その時、ぼくはビックリしました。(27)20分休みにもう一度見ました。するとキャタビーが動いていました。

2006/10/31 今日、ぼくはカマキリをみました。ぼくは、びっくりしました。友だちがキャタビーが食べられたといっていたので、むしかごをみました。けどキャタビーはいませんでした。だから、かわいそうとおもいました。(28)

2006/11/1 今日の朝、学校にいきました。カマキリてい国をのぞきこむとキャタビーが食べられていました。私たちがいっしょうけんめいそだててきたのに、そのキャタビーは、M君がみつけたので、M君はかなしんでいました。カマキリは、肉しよくだなと思いました。(29)

2006/11/1 きょう学校に行ったらキャタビーが食べられていました。カマ王は、おなかから食べていました。みんなが20分休みは、まだ生きていたといっていました。でも、放課後には体の中味を食べられていたのが、生きていた時の半分にちぢんで死んでいました。カマ王にかなうこん虫はいないと思いました。(30)

2006/11/1 今日また母の姉が来ました。姉が帰って家に入ろうとしたら、ドアの所に8センチぐらいのオスカメスのカマキリがいました。私はカマキリだとすると、すぐドアを少しあけて母にいいました。「いらないわりばしと、ふくろちょうだい」と、言うも母はいそいでもってきました。そして、私がわりばしで、カマキリをつかまえました。それでふくろの中に入れて、家の中にあつたはこの中に入れて、その中にキャタビー、かんの中に入った水を入れてずつかんさつしてました。(31)

2006/11/6 カマ王タナ王どっちが生きのこるのか。いろいろな昆虫を食べつくしたカマ王それに対してタナ王はどう反撃するのでしょうか。信じられな〜い。なんとタナ王がカマ王を弱らせて、タナ王が勝利。カマ王おしくもむねんの敗退。でも、ちょっと悲しいです。(32)

2006/11/6 今日、朝、教室に入ってみたら、みんながださわざしてた。みんなカマ王のかごのまわりに集まって中を見てた。私も何かかと思つてのそのそ近づいてみたら、なんとカマ王が死んでいた。どうどうタナ王がかつた。私は心の中で少しやつた〜と思いました。でもカマ王がかつとは思いませんでした。家に帰って、母にその事をおしえると、母はびっくりしてました。「うそ、うちのカマキリがかつちゃつたの」と

がごとしです。ヤモリもそうでした。子ども達の帰った放課後の教室にやつてきたのです。「消しゴムころりん」のあのヤモリがやつて来たのかと思いましたよ。以前、H子さん、O君、Nさんがヤモリのことを書いていたけど、正直、そんなにいるのだろうかと思っていました。いるのですね。(12)つかまえて「カマキリ帝国」の水そうに入れておきました。(中略)キャタビーというのは巨大な青虫です。登場のいきさつについてはk君の日記に詳しい。「カマ王」においかけられながらも、モンゾモンゾと動き回っている。A君はちょうになれと言ってるが多分、ガになるのではないでしようか。(13)

2006/11/8 しばらく青虫キャタビーの姿を見かけませんでした。四センチ近い大きな体でモンゾモンゾと動き回る姿は可愛いもので、三の一のアイドル的存在でした。でも、こんなことでもなければ、キャタビーは「アオムシ気持ち悪い!」と言われつつつけられたことでしょうね。(14)でも、悪役「カマ王」がいました。この強烈な存在の前では、すべての虫たちは愛すべきものでした。土の中にもぐっているのだろうと思いましたが、生きもの係が土を掘りかえしてみたところ、ヤモリ同様、くいちざられ体液がすいとられてしまったからなのか、大きな体は半分ほどにちぢんでしまっていました。(中略)そんなカマ王にも強敵が出現したのです。「タナ王」の登場です。しばらく見合ったままでしたが、近づくにつれ激しくぶつかりました。そして、なんとカマ王が横っ腹をかみつかれたのです。すぐに、体を大きくふってタナ王をふりとばしました。それから、またにらみ合いです。それからカマ王も手を出すことはありませんでした。こうして二日(木)、カマ王とタナ王はにらみ合ったまま過ごしていました。そして、三連休の明けた六日(月)一。ついに死んでしまいました。タナ王に食べられることなく、大きなおなかを上にとさらして死んでいました。(15)カマ王の詩“を作り、おくつてあげたいと思います。すてきな葬別の詩を作つてあげましよう。

2006/11/14 (前略)カマ王の死のきっかけをつくつたタナ王の時代が始まるのかとみんなが思っていました。しかし、N君がつかまえてきた「ヒダ王」にあつという間に食べられてしまったのです。タナ王は羽を残しただけでした。あらためて自然のきびしさを目のあたりにした思いです。しかし、さすがカマ王です。食べられることなく大きな腹を上に向け死んでいました。さすがカマキリ帝国の帝王「カマ王」です。(16)

言いました。このままぶじにそだつといいです。(33)

表 3 は、カマキリが偶然教室に侵入してきたことにより、子どもたちの生き物への関心が高まってきた時期である。大楽は、放課後に偶然教室に入ってきたカマキリ、ヤモリを捕獲し教室で飼育する。身の周りにヤモリが生息していることは、これまでも子どもたちの日記に書かれており(下線 17, 18), 大楽は、ヤモリが実際に生息しており教室にやってきたという事実を学級通信に掲載することで、ヤモリを発見した驚きを子どもたちと共有していく(波線 12)。その後、子どもたちが捕獲してきたイモムシにキヤタピーという名をつけ飼育し(下線 19, 20), 大楽は、その様子を子どもとともに詳細に報告していく(下線 21)(波線 13, 14)。しかし、教

室に侵入してきたカマ王と名づけたカマキリがヤモリとイモムシを捕食してしまうことで、生き物の生存競争の事実立ち会うことになる(下線 22)。そして、子どもたちが新たに捕まえてきたカマキリによって、カマキリ同士の生存競争がはじまり、子どもたちは、自らも生き物の闘争に参入しているかのような心情になっていく(下線 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33)。同様に大楽もその様子を詳細に報告していく(波線 15, 16)。生き物の生存競争に対する興味・関心や、生き物への憐みという感情が、学級内の子どもたちに共有されている。こうした子どもたちの共通の価値創出は、学級文化の創造と解釈できよう。

表 4 コオロギワールドの誕生 カマキリの死

子どもの日記	教師の言葉
<p>2006/10/20 コオロギ大作戦1。コオロギは虫の死がいを食べているそうです。そこでぼくは、コオロギ大作戦を思いだしました。ペットボトルのしたのほうをきる。このなかに虫の死がい(ミズ)をいれる。コオロギが入ってくる。(34)30分くらいたったら、ひもでひく。100パーセントはいつてるとはいえない。たまにありがいはいつてるかもしれない。コオロギ大作戦2。うちのほうでコオロギがないポイント。どてで、ないいて。○○親水公園のあそぶところで、たまにないいて。○○親水公園のいけのあたりのくさで、たまにないいて。いそうなところ。うちのはたけのまわりにいそう。おじいちゃんのにわにいそう。(35)むかしは、よくえんのしたでとびはねていたと、おばあちゃんがいつてました。いまはいないと思います。夏ではなく秋になるとでてくるそうです。秋は、生き物にとって生きるのにこちよいおんどなのです。むかしはコオロギのことをキリギリスとよんでいたそうです。コオロギはバッタにいてる。コオロギ大作戦3。コオロギのかい方。紙のたまごパック2こ。プラスチックのカップ。土、カップにはいるくらい。ガラスのようき。たべものは、りんご、かつぶし。カップの中いがいのところには、土を入れない。できるだけひかげをつくる。はっぱもいれておいたほうがいい。めす2ひき、おす2ひき、いれればこうびできる。(36)</p>	<p>2006/11/8 ほろびてしまったバッタ王国にコオロギ達がはね回り、静かな鳴き声をたてています。Y君のおじいさんがつかまえてきてくれました。ようやく“コオロギワールド”が誕生しました。(17)O君が自由勉強で「コオロギ大作戦」を三回にわたってまとめてくれました。Y君、生き物係の人たち、参考にしてくまく育ててください。(18)最低気温が十度を下回ってくるようになります。そう長く生きられそうもないと思います。土を十分にしめらせるようにしましょう。そして、エサも忘れずに入れてあげてほしいですね。オスとメスがいます。す。(くわしく確かめていません。調べてみてほしいな。)たまごをうませられるといいね。(19)Y君のおじいちゃん、ありがとうございました。いい勉強ができそうです。</p>
<p>2006/10/31 きょう、そばが家にやってきました。な、なんとコオロギと、こうようをもってきました。コオロギは、かつしか区たかさごというところの、あきちにいそうです。ぼくは、コオロギのなきごえをはじめてきたのでよかったのです。かわいいなきごえでした。(37)つぎのこうようは、やく10しゆるい。しゆるいは、かきのは、さくらのは、つたのは、ふじのは、なんてんのは、いちようのは、などいろいろありました。ぼくはほんとうに、そばにかんしゃです。あしたもつていきます。</p>	<p>2006/11/21 前日、生き物係のH子さんが「せんせ、ヒダ王元気ないよ。死んじゃうの?」と話しかけました。そんな感じでした。でも、その翌日、ヒダ王が待望のタマゴを産んだのです。「おしりから白いものが出ています!」木工用ボンドのような見るからにねばり気のありそうな白い液体です。ぼくは初めてです。カマキリの産卵というものテレビなどの映像では見たことはあるが、目の前で見るのは感動です。(20)(中略)来年の春、ここから何びき出てくるのでしょうか?ヒダ王は弱ってはきましたが、まだ動いています。そんなヒダ王にA子さんがたくさんのバナナ虫を入れてあげました。でも、以前のように勢いよくカマをふりかざすこともありません。右の変色していたカマは黒くなってしまいました。どうやらくさりかけているようです。ヒダ王は産卵を終え、死をむかえるようです。(21)</p>
<p>2006/10/31 今日帰る時、ヒダ王にきりふきをかける時、なんか食べる物がなくなったしまったので、A子さんとT子さんと私でカマキリのエサとりをしました。(38)学校のうら、かだん、いろいろさがしました。でも、なかなかいません。すると、A子さんが、とまって「パシッ」つかまえました。ちょっとあけると「パッ」とんでいつてしまいました。それから、みかんの木に行つて、それをとつてヒダ王のふかふかベットを作つてあげました。</p>	
<p>2006/11/14 今日、学校に行つてカマキリがいるケースをのぞいてみると、上にカマキリのたまごがありました。ぼくは、テレビでは見たことがありますが、本物はみたことがないのでびっくりしました。たまごからは、何びきのカマキリのあかちゃんがうまれるかたのしみです。(39)</p>	
<p>2006/11/14 今日の朝休みにヒダ王がたまごをうみました。みてみたら、カエルのたまごみたいになっていました。生き物係さん、たいへんになるけど、がんばつてそだててください。(40)</p>	
<p>2006/11/14 今日、カマキリ帝国のヒダ王のたまごがありました。白いあわのような形をしていました。カマキリの卵の中からは多くて二百匹ぐらい、少なくて百匹のよう虫が出ます。(41)生まれた時は、きっと空気の入る穴からにげ出してしまふと思います。</p>	
<p>2006/11/14 今日、朝、教室に入つてみたらみんなが大さわぎしていました。だれかが、ヒダ王がたまごを生んだ〜と、さわいでいました。私はすぐさまかけつて、かごの中を見ました。すると、小さなあわみたいのでつつまれたたまごが見えました。S君がいつていました。あれは二百びきぐらい生まれるんじゃないと。私は心の中でそんなにいっぱいいらね〜よ〜と思いました。(42)</p>	

表4は、コオロギワールドの誕生と、カマキリの死について描かれた時期である。なかなか捕獲できなかったコオロギをY君のおじいちゃんに捕獲してもらい(下線37)、クラスにコオロギワールドが誕生する(波線17)。大楽は、これまでO君がコオロギについて調べていたこと(下線 34, 35, 36)を学級通信に掲載して生き物係に育て方を紹介する(波線 18)。一方、生存競争に生き残ったカマキリのヒダ王は、生き物係が中心にエサをやり飼育され(下線 38)、やがてヒダ王は卵を産む(波線 20)。多くの子どもたちが、さっそく日記にヒダ王の卵のことと新しい生命への期待を書いてくる(下線 39, 40, 41, 42)大楽も、新しい生命への期待と、産卵を終え死をむかえる生き物の憐みについて報告する(波線 21)。カマキリの卵の出現は、これまでに構築されてきた生き物の生存競争に対する感情から新たな生命を期待する感情へと変容し、学級全体に共有された学級文化として継続・発展していくと解釈できよう。

4. 考察

時系列に沿って分析した結果、子どもたちの生き物をめぐる学級文化の創造プロセスは、表5の通り4つの段階に分類できる。第I段階では、生き物とのかかわりが子どもたち個人の体験でしかなく、学級全体の活動や共有された感情を読み取ることはできない。しかし、第II段階では、生き物の捕獲の欲求が学級全体に広がっていき、捕獲の方法を調べたり生き物の探求が始まるようになり、生き物をめぐる学級文化の萌芽を読み取ることができる。そして、第III段階では、学級全体が生き物の凄まじい生存競争に立会い、生き物たちの闘争に代替的に参入し生き物への思いを共有していく。ここには、生き物にまつわる独自の学級文化の創造を読み取ることができよう。最後に、第IV段階では、構築された学級文化が子どもたちの共通の思いとして継続・発展されていく段階と解釈できる。以上のように大楽実践では、子どもたちが生き物と濃密にかかわり、そのことを日記に書くというインフォーマルカリキュラムの存在によって、教科教育というフォーマルカリキュラムとともに子どもたちの自然体験が構成されているのである。そして、この双方を

つないでいるものは、これまで分析・検討してきた学級通信なのであり、ヒドゥンカリキュラムとして重要な役割を果たしているといえよう。

表5 生き物をめぐる学級文化創造のプロセス

第I段階	個人による生き物の成長への期待, 生き物の喪失と生命への期待	個人の体験
第II段階	集団による生き物の捕獲の欲求と調査・探索, 生き物係の誕生	学級文化の萌芽
第III段階	集団による生き物の生存競争への興味・関心と憐みの感情, 飼育の開始	学級文化の創造
第IV段階	集団による生き物の新たな生命への期待, 飼育の継続	学級文化の継続

5. おわりに

子どもたちは大楽との日記交換を通して、体験を語り、体験を深めていく。子どもたちの描いた季節の変化や生き物とのかかわりの日記は、同じようなテーマが揃うと学級通信に掲載される。学級通信というクラス共通のテーブルの上で相互応答的なコミュニケーションが展開され、ファイルに蓄積されることによってそこに物語性が付与されるのである。人はなぜ自身の経験を物語るのでしょうか。認知言語学の観点から述べるならば、人間は客観的な事実だけをコミュニケーションするのではなく、話し手自身が経験の意味を見出しつくりあげたものをコミュニケーションするのである(大堀 2004)。子どもたち一人ひとりの日記にも、各々が日常生活の中で自身にとって意味のあるものが選択して書かれている。プラマー(1991)は、日記を付けていくうちに、作者は日記が一つのまとまりを持つものであることに気づき、その考えに基づいて記載する出来事を取捨選択していくという。本研究の子どもたちも、しだいに学級文化に基づいて日記に記載する出来事を選択していったのである。大楽学級においては、子どもたちと教師が経験した出来事に共通の意味が見出されることによって、物語生成としての自然体験が展開されているのである。

引用文献

- 池上嘉彦(1984)記号論への招待 岩波新書 10頁
- 小川博久(1998)「子どもの遊びと環境の変化—変わりゆく『子どもの遊び』の意味と環境の変化—環境情報科学 27-3 22頁
- 大堀壽夫 編(2004)認知コミュニケーション論 大修館書店 275頁
- 藤本浩之輔(1985)子ども文化論序説—遊びの文化論的研究— 京都大学教育学部紀要 31号 5-20頁
- ケン・プラマー(1991)生活記録の社会学 光生館 28頁
- 安井一郎(1990)特別活動と人間形成 山口満編学文社 103-106頁